

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

ほうご 法語

平成28年7月第1週放送

仏様の教えを端的に示した言葉を「法語」と言います。漢文、和文、韻文、散文、話し言葉など、さまざまな形で表現されるものの総称ですが、とりわけ葬儀や法事などの法要・儀式で用いられているところをお聞きになった方も多いのではないのでしょうか。

導師がお香を焚き、仏前に語りかけるところから「香語」とも呼ばれます。

例えるならば、法要・儀式の場が舞台であるとする、「法語」はいわばせりふのようなものです。仏様やご先祖様に対して発せられ、荘厳かつ聴覚的に美しい響きを持つ言葉。中国における民間の歌謡に由来し、読むことを前提に韻を踏む表現法である漢詩がとりわけ好まれたのはこの様な理由からだと考えられます。漢詩は、日本でも奈良時代以来の伝統があり、禅の世界では、後に禅林文学、五山文学として室町時代に花開くこととなります。

すると、「法語」は雅なものだとお考えになるかもしれませんが。しかし、禅の「法語」は時に事実としてはあり得ないような夢物語や、朝に太陽は東から昇り夕方には西に沈むというようなごく当たり前の事実を表現することもあります。禅の「法語」が難解であると言われる所以です。

さて、皆様の中には、そもそも禅は「不立文字」(ふりゅうもんじ)とあって、語ることを重視しないのではないかとおっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんが。ところが、禅の「法語」を集めた法語集である「語録」は、道元禅師の『正法眼蔵』をはじめとして、東アジアの仏教書の中では1ジャンルをなす程の分量が伝えられています。なぜでしょうか。それは、「法語」が実際に発せられた現場の姿を数多く記録してきたからなのです。

そもそも禅は、私たちの用いる言葉に強い疑いの眼を注いでいます。

言葉は我々人間に多くの恩恵をもたらしてくれます。しかし他方、言葉は我々人間に多くの苦悩をもたらす張本人でもあります。そのつもりはなくとも人を傷つけることもあります。自分の心の中に心配や不安を生み出すこともあります。

禅では言葉について、発する側と受け取る側の間に齟齬の生じる不確かな装置だと考えているのです。

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

しかし、言葉抜きに仏法ぶつぽうの核かく心しんを伝えることはとても困難です。それ故に「法語」は読まれることが大切なのです。それはあたかも、舞台上で相手と直じかに問もん答どうを交かわすかのような、一期一会いちごいちえの仏法ぶつぽうのあらわれだからです。だとすれば、例え表現は同じであっても、受け取る人、受け取る時や場所が違えば、伝わるものも異なってきます。丁度ちやうど、同じ本であっても、読む人や時が違えば、感じ方も異なってくるようなものです。その瞬間、その相手のために語られた言葉は、一度きりの特別な言葉となるのです。それをどう受け止めるのか。「法語」とは、受け取る側の力りきりよく量も同時に問われている言葉でもあるのです。

— 終 —